琵琶歌（下）

部落問題文芸・作品選集

第24巻

大倉桃郎著

琵琶歌（下）

世界文庫版

部落問題文芸作品選集　第二四巻

昭和五十年五月十五日発行

発行者　松本富夫

発行所　株式会社世界文庫

東京都目黒区洗足二―一二―一五
電話　〇三（七一六）六一五一（代表）
（七一三）九二四四（夜間）
振替　東京　七八四九八番　〒一五二

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

前篇

琵琶歌梗概

(一)

相州の三浦半島、神武寺の山麓に荒井三藏と云ふ壯漢があつた、亡父が財多てあつた處から村の人は三藏を新平民と卑しんで交際もしない、三藏は僅かの畑を耕したり持山の木を薪に賣るのを業として妹の里野と共に寂しい生活を續けて居た。

併し村の人は三藏を除外漢にしたが村役場では三藏を一戸の戸主と認めて夫れ夫れの稅を課した、と同樣に國家も三藏を一人前の國民と認めて兵に徵した。

妹と別れて入營した三藏は、こゝでも戰友から新平民として排斥された、絕えず戰友に嘲られ疎まれながらも三藏は悲憤の情を抑へて熱心に忠實に軍務に從ひ一年の後拔擢せられて上等兵に進んだが、其夜戰友等は三藏の昇進に不快を抱き、寄り集つて惡罵し嘲笑して、あらゆる侮辱を三藏に與へた、三藏は憤恨の情禁め難く夜更け人靜まるを待つて兵舍を脫出し脫營を企つるに至つたが、端なく北斗の七星を仰いで漸く心の鎭まると共に兵士としての自己の責任の重大な事を感じて脫營を思ひとゞまつた。

其樣子を陰から覗つて居たのは同じ中隊の上官で多くの人が三藏を卑む中に只一人三藏に同情を有つて居た柳田義夫と云ふ伍長である。

伍長は三藏を自分の室に誘つて懇々脫營の不心得を誡しめ更に三藏の不平を慰さめた、以來三藏は伍長

に慰藉され激勵されて缺點なき兵士として立働いた。

話變つて三藏に別れて山麓の孤家に殘された里野は只一人淋しく暮してゐたが小春日和の或日、鎌倉に住む小學校教師武田貞次會社員西村禮太と云ふ二人が神武寺登山の道に迷ふて孤家を訪づれ、里野から道を敎へられ、下山の折又訪づれて茶の馳走になつた夫れが緣となつて貞次は里野を戀ふて妻にと望み、禮太は媒人役となつて奔走したが里野が穢多の子と云ふ處から二の足を踏み、正次の母お辰、父正次も反對した、併し貞次の戀は熱烈であつた、母先づ折れ父も納得し禮太も快く贊成して兵營の三藏に結婚談を申込んだ、妹は一生自分の下におきたい慘酷な世間に出したくないと思つてゐた三藏も貞次の熱心にほだされて承諾した、而して新平民の兄が有つては里野も可哀さう、新平民の親戚があつては武田の家も迷惑であらうとの遠慮から里野との兄妹の緣を絕ち、里野は如何なる事があつても武田の家で死なして呉れろと泣いて貞次に賴んだ。

斯うして里野は花嫁となつた。里野と貞次との仲は睦しかつた、武田の家も幸福であつたが、夫れも長くは續かなかつた、元來貞次の父正次は極めて放縱な人である、慣るゝに連れて里野に對して猥ちな態度を屢々示した、お辰は嫉妬の炎を燃やした、其反動が里野に來る一家の折合益々惡く遂に或日の出來事からお辰は里野の離緣を貞次に迫つた母を棄てるか妻を去るかと迫つた、貞次は母への義理に餘儀なくされ、母の怒りの收まる迄一時身を避けて呉れと里野を諭した、而して再び同住になるまでは毎日手が觸れぬ事の無かつた琵琶も塵に埋めておくと盟つた里野は再び琵琶の音を聞く事の出來る期を泣いて待つて居ますと云つて神武寺山下の孤家に歸つた、其以前に三藏も除隊になつて家に歸つてゐた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

(二)

愴然として歸つて來た里野は、三藏に對して多くを云はぬ、只武田の家の都合で離緣されたと語つただけである、武田の家の事情一切を打明しては姑、舅の恥になるとの優しい心から秘して了つた、從つて三藏は貞次を單に無情冷酷な人として恨み憤つたが、結局、是れからは兄妹二人水入らずで泣いて暮さうと云つて里野を慰めた。

貞次を戀し、又信じてゐる里野は、何時かは貞次が迎へに來る事と、日毎其音信を待つてゐたが、月は變つても何の音沙汰も無い、里野は絕えず胸を痛めてゐた、慈愛深い兄はあつても、貞次との盟はまだ打明けてない、里野は人知れず泣いてゐた、思ひ餘つて神武寺へ復緣の祈願をかけた、每夜三藏の寢た後に密かに家をぬけて跣足參りをしてゐた、三藏は何時となく夫れと悟つたが、妹可哀さからなすに任せてゐた、只見え隱れに後をつけて妹の身を外ながら警戒してゐた、或夜里野は例の禮拜場としてゐる山麓を越えて、女の身一つで廿五町の坂路を深夜を冒して本堂前まで登つて行つた泣きつゝも永い間祈念を疑らした後、瞻て思ひ詰めた一念から神へ捧ぐるため自分の小指を嚙切つて了つた、後から樣子を見て居た三藏が驚いて介抱して背に負ふて山を下りかけると突然里野はけたましく笑ひ出した。

里野は其夜から發狂した、武田へ歸りたい琵琶の音が聞えるなどゝ、あらぬ事を每日口走つて兎もすれば附近の部落を彷徨ひ歩くやうになつた、三藏は愈々貞次を恨んだ。

年變つて卅七年となつた、東洋の風雲次第に急に日露開戰の期は迫つた、三藏は豫備兵である、一旦事起れば召集に應ぜればならぬ身だ、夫れまでは働けるだけ働いておかればならぬ、里野は依然物狂はしい

が夫れを監視する間もない。

二月初旬の或日三藏は例によりて持山へ分入つて町へ賣出す薪を造り、日暮に近く、神武寺の坂の中腹に休んで海を眺めてゐた、折柄突然礫と女下駄とが一度に落ちて來て三藏の指を傷けた、仰ぐと同じ坂の上の方に美裝した男女が立つてゐる。

女は花浦子爵の令孃菊枝と云ふ、父子爵は世に聞えた人ではあるが云はゞ風流の貴族で素行も修まらず家庭非常に亂れたゝめ母夫人は夫れを嘆いて自刄した、當時菊枝はまだ幼かつたが父の無情さと母の悲慘な最後とは深く胸に刻まれて遂には家を厭ふ心となつた、加之、父の愛妾が改めて子爵夫人になつてからは菊枝は日蔭の身同樣になつたので、我から乞ふて東京の本邸を去り、久しい前から葉山の別莊に僅かな召使と共に質素な月日を送つてゐる身である。

男は江島伯爵の令息春麿と云ふ貴公子である、以前から菊枝に戀してゐるので、是れも花浦別莊の間近にある自家の別莊へ來て、絶えず菊枝を訪ふては其歡心を得やうと力めてゐる、菊枝は春麿の輕薄な態度を卑んでゐるが親以來の知己の間柄とて體よく交はつてゐた、今日は春麿から强いて勸められ辭みもならずに共に神武寺に上つたのであつた、而して本堂に女の小指が奉納されてあるのを見て奇異の感に打たれながら山を下りがけに道の石の崩れかけを蹈誤まつたゝめ、下駄は足を離れて下に居た三藏へ落ちかゝたのであつた。

三藏が下駄を攫んで立上るのを、瞰下して春麿は上から、持つて來て呉れと云ふ、三藏はお前の雇人ぢや無いと怒鳴る、其間に菊枝は急いで下りて行つて無禮を詫び、三藏の手の傷を見て手巾で繃帶してやつた、此の謙遜つた態度に三藏は却つて腹立つたのを恥ぢながら家に歸つた、狂した里野は例によつて家に

居ない夕食時が近づいても歸つて來ぬ、三藏は待兼て搜索に出た。

（三）

三藏は月の夜を妹を搜して逗子の町から葉山へ出て漸く里野を發見した、里野は多くの人に圍まれて琵琶歌を口すさんでゐる、聲が美いとて人々は賞め立てる、笑ふものもある、嘲けるものもある、果ては其聲で兄貴と一緒に門附に出ろ、孤家に兄妹二人だけだから畜生と同じ眞似をしてるだらうと調弄ふ若者もある、三藏は憤然として群集の中へ暴れ込んだ、若者は身を飜して花浦子爵家の別莊へ逃込んだ、憤怒に驅られた三藏は若者を庭へ追ひ詰めて亂打した、菊枝は其前から月に浮かれて庭に出て、垣の外の里野の歌まで聞いてゐたので、召使の老爺に三藏を宥めさせ、更に三藏と里野とを室に呼び入れ事情を聞いた、三藏は自分が新平民である處から人々に憎惡まるゝ事や、自分も人々を敵としてゐる事やを語つた菊枝は深く同情した、其後は里野が附近に來る毎に家に呼入れさせて小供や若者やの惡戯から免かれさせてゐた召使の老爺は卑しい新平民などを近づけては名にかゝると諫めたが菊枝は人間に區別は無いと云つて居た其内に里野は病に臥した、生れて此方、村人に頭を下げた事の無かつた三藏も妹の病氣には勝てぬ、村醫の門に身を屈して來診を乞ふたが、村醫は一診したゞけて匙を投げた、聞傳へた菊枝は知己の醫師を紹介したが、其醫師も首を傾けた、兎も角も手當をして後の經過を見る事となつた。

間も無く日露の國交破れて、我海軍は早くも仁川港に敵艦を襲ふ、全國各師團には動員令が下る、在鄕兵士は召集される三藏の手にも召集令狀を受取る事となつた。

里野は狂した上に、餘病を發してゐる、併し國家の急に家を顧みる事は出來ぬ、三藏は妹を捨てゝ劍戟

を執らればならぬ、新平民と卑まれた身も、人に劣らぬ働きを見せて、人々の目を覺まさればならぬ。

三藏は寧ろ妹の死を希ふた。

此折柄、菊枝は召使を連れて梅を見ての歸りがけを、俥で山麓の孤家を訪れた。

里野は死したる如く臥してゐる、而して時々目を開いて、うろ覺えの琵琶歌を低く口すさむ、はては良次の名を呼んで、武田の家に歸りたいと云ふ。

里野が手をあげて空を探つた時、菊枝は目敏く里野の小指の失はれてあるのを認めた、三藏は指を切つた次弟を語つた。

菊枝は曾て神武寺本堂で見た指の黑く血の凝つた切口を想ひ出した、夫を戀ふて指を切つた里野の切なる心大なる悲慘を感ぜずには居られなかつた。更に此妹を殘して戰場に馳向ふ三藏の心を痛ましいと思つた。

菊枝は遂に三藏に向つて哀れな里野を別莊に引取り出來得るだけの世話をしやうと云つた。

是れで三藏は心殘りもなく兵營に入る事が出來るやうになつたのである。

三月某の日三藏は古びた軍帽、古びた軍服を着て逗子停車場を發した、他の兵士は多くの人と多くの旗とに送られたが、三藏を送つたのは數人に過ぎなかつた、併し此數人の中には花浦子爵令孃がゐた、江島春麿がゐた、夫れと知つた人々は新平民と華族とが送り送られする奇なる光景に對して不審を抱いて、而して菊枝の身の上について惡い噂を立てる者すらあつた。

（琵琶歌前篇梗概　終）

後篇

琵琶歌

大倉桃郎

第一回

「やあ、久濶」とばかり。

歩兵×聯隊の浴室を、今出たばかりの二人連の豫備兵、一人は瘠せて頰骨が高い、下瞼が薄らと黒い男、連れの一人は眉の濃い色白の細面の好男子。

二人共浴上りの頸のあたりに血の色が濃く出て暖さう、これが木立に沿ふた巾の廣い緩傾斜な坂を兵舎の方へ、明治三十七年三月中旬の、まだ底寒い風の吹く中を、ぶらりぶらりと上がつてゆく。

折柄上から下りて來たのは、是れも豫備兵らしい大男、肩巾廣く逞しく、四角な顏に大きい目が強く光つてゐた。

坂の最中で出逢つた時に、瘦せ男が先づ狎々しく「やあ、久濶」と聲をかけたので

ある。

聲ばかりでなく、態度も狎々しかつた、痩せ男は下から受けるやうに擧手の禮をして、夫れでも足らずに小腰を屈めて、云はゞ軍隊の敬禮と世間普通の禮式とを亂調子に搗き交ぜたやうな寧ろ踊ると云つた方が適當な位の挨拶を施したのである、其姿が滑稽なだけに親みを表はす度は却つて深かつた。

動員令が下つて、此二三日來續々召集された豫備兵等が聯隊に充滿するやうになつてから何時となくこんな、滑稽な挨拶ぶりが流行り出した。

豫備兵等は鄕里に歸つて久しい間、農工商夫れ〴〵の家業、職業に就いて世間の風に吹かれてゐた、召集されたのは昨日今日の事なり、まだ里心は殘つてゐる軍隊の禮式は知りぬいてゐながらも兎もすれば平素の習慣が附纏ふ夫ればかりで無く、久しく打絕えてゐた昔の戰友に久しぶりで會つて見るとこれも平素の習慣から、軍隊風の擧手注目の敬禮では餘りに嚴格すぎて情に乏しい心地がする、何となく物足らぬそつけないと思ふ、そこで妙に碎けた滑稽な敬禮方を行つて舊友に對する歡喜の情を表はすので。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

痩男は畢竟、其流を行つて大男に對して敬意と親密の情とを示さうとしたのであるだか大男は何と思つたか、屹として痩男の顏を見たばかり、口は固く結んで笑さへ漏さぬ、極めて冷淡に

「や」と、有るか無さかの聲、僅かに目禮を返したゞけで行過ぎた、而して輕く緩やかに兩手をふりながら悠々として坂を下りて行つた。

「おや」と痩男は不滿の色、顧りさまに歩を停める。

「何がおやだい」と今まで默つて冷かに最初からの一切を眺めてゐた連れの好男子が、此時後から痩男の肩を叩いて。

「しつかりしろい」。

「え」。

「何だ其面は」と好男子は苦々しげな語調「であんな奴に敬禮するつて事があるか」

「敬禮つて譯ぢやない、只挨拶をしただけだが」。

「どつちでも同一だ、ばかだな」。

「何故？」。

「中村！、お前も老耄しちやつたぜ、彼奴を誰だと思つて聲をかけたんだ」。

「うむ、鳥渡誰だつたか思ひ出せないがね、何しろ現役中に知つてたのだ、顏は確かに覺えがある、だからまあ愛嬌に聲をかけて見たんさ」。

「だが誰だつたかな」と痩男の中村は首を傾げて不審する。

「はゝゝゝゝ豫備はこれだから駄目だ貴樣荒井を忘れたんか」。

「荒井？」。

「夫れだ、餘程何うかしてゐやがる、肋骨一本足りないつて云ふ劣等人種だ忘れたんか新平民の荒井を」。

と好男子は頤をしやくる。

第二回

「おう」と中村は頓狂に踊りあがる、機に地に落した濡手拭を慌てゝ拾つて塵をはたきながら漸く歩き出した。

「成程荒井だ、穢多の三藏さんだつた」と重ねて云つた。

「今氣がついたか」と好男子は嘲笑ふ。

「濟ないが漸とお氣がつかれました」と故と頭をかいて「飛んだ失敗だ、成程知つた顏だと思つたら知つてる筈だ相互に現役中には隨分彼奴を虐めたものだからな併し彼奴、何中隊へ召集されてるだらう」。

「第四中隊さ」。

「何だ君と一緒か」。

「一緒も一緒、しかも小隊まで同じだから厭になる」。

「那樣ことは如何でも可からう」。

「大いに可くない、考へて見ろ、現役中には俺の方が一年故參だつたから、湯桶の湯だつて俺等が飲んだ後でなきや彼奴にや嘗めさせもしなかつたのだ夫れが今となつては彼奴の方が筋が一本多いぢや無いか、俺に取つちや上官だ、昔のやうに後から湯を飲めたあ云はれまい、如何かすると彼奴のお流れを頂戴するやうな事になる

其上、室田室田つて、彼奴に呼つけにされる、練兵に出ると彼奴に號令をかけられてお一二お一二とやらんけりやならない、現に今日もだ散開教練で彼奴に追廻された

何でも俺の動作が鈍いつて、彼奴が文句を云ふ、笑談ぢや無い新平民の號令なんかで活潑の動作が出來るもんか。

餘り鈍い鈍いつて云ふから、俺も腹が立つて鈍いのは是非が無い、召集されたばかりだからまだ熟練ないのだと云つてやつた」と室田はぐつと肩を聳かす。

「面白かつたな」と中村が微笑んだ

「處が」と室田は眉をきりゝと動かして「彼奴の云草が可い、熟練ないから熟練るやうに注意してやるのだ、夫れが練兵だとよ。

人面白くも無い、俺を捕めて練兵の講義をする氣でゐやがる

穢多から説教聞くのは始めてだ、と俺は云つてやつた、尤も小い聲で云つたんだが意味ぐらゐは分つたんだらう、彼奴が凝然と俺を睨んだつけ、何しろ彼奴も現役中とは異つて大分押が強くなつてゐるから、俺も班の連中も鼻を突合せても成るべく口を利かないやうにしてるが、併し是れから先、彼奴と一緒に戰地に行かなきやならんかと思ふと、うんざりだ」。

「可いぢや無いか、閑な時に揶揄つたりすりや娯みになる」。

「ふん、他事だと思つて厭に悟るぜ、貴樣も彼奴に號令をかけられて見ろ、那樣ことは云へなくなる」。

「僕はまだ、新平民の指揮を受けるやうな罪はつくらない」。

「其代りに敬禮したらう、俺はまだ彼奴に敬禮なんざしない」。

「如何だかなあ」と中村は笑つた。

「不肖ながら室田東馬は士族の流れだ昔なら旗本の三男——」。

「分つた、分つた」と遮つて、「惡い僻だ、二言目にや旗本が出る、君が旗本と云ふと、僕の農夫が氣がひけて堪らない、那樣ことはお預けとして、どうだい晩に遊びに來んか」。

「うむ」と室田は可厭な顏をしたが、すぐ色を直して、「行つても可いが夫れより俺の方へ遊びに來い、知つた連中が大分班にゐるからな、久しぶりに酒保の攻擊でもしやうぢやないか」。

「可いなあ」と考へて「都合を見て行かう、ぢや失敬」と中村は例によつて滑稽な敬禮をした。

「待つてるぜ」。

「む、荒井によろしく」。

「笑談ぢやねえ」と室田は臂を張つて目を瞋らした、中村は崩るやうに打笑つた。

第三回

中村と室田とが笑つて別れた時、荒井三藏は大隊浴場の浴槽の中に身を沈めて、疲れた肌に泌む湯の加減に恍惚としてゐた。

三藏が召集を受けて入隊したのは三日前である、入隊して身體檢査が濟むと、もう武器被服を支給されて、夫れを掃除する閑もなく其日から練兵をしなければならなかつた。

「聯隊は近い中に出征する、もう日數は僅かしかない、今の間に練兵をしなければする時が無い、只一時間の間も惜しい、猛烈に練兵をして實戰に對する準備をせねばならぬ」。

と最初の練兵の前に中隊長がキラリと刀を拔いて豫備兵を勵ました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.